易に二千年以上昔の巡禮や、其宿つた福舍 Dharmaśālā や、その食物を求め、香華などの供物や、家への土産にする記念品を買つた小店の有樣を想ひ浮べる事になる。蓋し、半ば宗教的で、半ば商賣的な、信仰の群でもあり、市でもある樣な有樣であるが、之は何れの國に於ても、假令僅かでも巡禮のある所には何處にも見る光景である。唯今日では、記念として到る處で繪葉書を求めるが、其昔にあつては、遙かに幼稚なもので滿足せざるを得なかつたのである。中世紀の歐洲では、巡禮に使つた標章は、概ね金屬を打拔いて作つたのであつたが、印度では、殊に陶土の小球に刻印を捺した極めて安價なものであつたので、今日でも、アフガニスタンから安南にかけて、大抵見受けるのである。然し、斯る記念品の賣買が、世界的であると共に極めて古いものであつて、要するに、人類の宗教的本能といふべきものに適はしい事は、思ふに、何人も之を拒む譯にはゆくまい。此の點を取つて、佛教彫刻の起原を探り、その極めて不思議な矛盾と共に、その極めて合理的で不變な特質のある理由を求めようとするのであり、而も之が得られると信ずる。而して之を